

# 新春特集

JAさっぽろトップインタビュー

常在戦場

代表理事組合長として、JAさっぽろを率いる藤田範彦組合長は就任から三ヶ月経った今、何を思うのか――。

本年の新春特集では、組合員の皆さまに藤田組合長の人となりや「JAさっぽろ」への想い、考え方を知っていただくために、インタビューを企画致しました。



JAさっぽろ 代表理事組合長

藤田 範彦 組合長

――藤田組合長、あけましておめでとございます。

組合長 おめでとございます。ありがとうございます。

――今日は藤田組合長の素顔を覗かせていただきながら、率直な思いやお考えをお聞かせいただきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

――さて、今年は午年！ということなのですが、組合長は何年生まれていらっしゃるんですか？

組合長 私は昭和二十一年の戌年です。

――そうですか、お若いですね！早速ですが、組合長自身が分析されるご自身の性格については、どのようにお考え

ですか？

組合長 これは、頭から難しい質問ですね。困りますけれども。どういったらいいでしょうか。

――では、真面目なタイプか不真面目なタイプかといいますとどちらでしょう。小さい頃はどのような少年だといわれていましたか？

組合長 真面目なタイプだと思っていますが、周りにはあまり認めてくれないようです。私は次男坊なんです。兄貴とは違って好き勝手にやっております。

――だいたい次男坊というのはそういうものですね。ご兄弟はほかにいらっしゃるんですか？

組合長 妹が二人と弟が一人の五人兄弟です。私たちの時代は五人・六



聞き手

JAまつりや温泉湯治の司会でおなじみ

株式会社 CAN 山口 暁美さん



人兄弟は当たり前でしたから、私も弟と十歳離れていまして兄弟であっても育った環境がかなり違うという印象があります。親はとにかく朝早くから夜遅くなるまで外に出ておりましたから、私も子供たちと遊べるなんてことはなかったわけで、お正月あるいはお祭りとか運動会といった時に一緒に過ごせるというのが当時の楽しみでしたね。

——組合長のご出身は厚別地区と伺いましたが、どのような農家だったのですか？

**組合長** 私の所は水田、畑作を中心に果樹、花、養鶏、種卵の出荷などもありましたが、昭和三十七年下野幌団地、JR新札幌駅への千歳線切替のため用地の買収で耕地面積が減少したことから、トマト・キュウリ等の果菜中心になりました。ご存知のように、昭和三十五年頃の厚別は、札幌市の急激な人口増加により地域の様子が刻々と変わっていき、農業者の生活環境も大きく変貌した時代でありました。

——色々なものを生産されていたのですね。家族総出で作業されていたのではないですか？

**組合長** そうですね、だいたい家族で分業されていたように感じます。例えば、花とか鶏、卵は祖父母が担当して、水田や果樹、あるいはジャ

ガイモやその他野菜関係はおやじとお袋がやっていましたね。私は：正直言いますと繁忙期は手伝っていたと思います。どちらかというところ収穫したものを売って歩くのが好きでした。それこそ中学生の頃から行商やりましたよ。

——行商ですか！どの辺りをまわっていたらっしゃったんですか？

**組合長** 今の厚別、新札幌駅界隈です。学校から帰ってくるとそんなことをやって、帰りにお袋のおつかいで何か買物して帰るといったことをやっていました。

——お優しい少年だったのですね。農協と関わりはその頃からあったのでしょうか？

**組合長** そうです。私の所は明治二十四年に下野幌（現青葉町）に石川県から入植致しまして、一二〇数年農業を継承してまいりました。私で四代目となるのですが、当時の旧厚別農協からずっと関わりがありますね。昭和四十六年から兼業農家になりましたけれど、新しい事業についても仕入れ等全て農協からでしたし、経営管理を含めた相談事など節目節目で頼りにしてきたように思います。

——組合長にとって、農協はまさに生活に欠かせない存在だったのですね。そのようななかで、生産者側から、

少しずつ農協のなかに入っていくって、現在は経営に携わる立場でいらっしやいますが、どのように感じていますか？

**組合長** 昨今の我々の置かれている環境・情勢は非常に難しい状況になっており、いうまでもなく組合員の高齢化や後継者不足など、いわゆる農協だけの努力では解決できない問題が浮き彫りとなっています。都市農業を守る、あるいは振興するということはやはり生産者、生産者団体、行政がそれぞれの役割のなかで一体となつて仕組みを作っていくかなければなりません。例えば農地の優遇制度など営農意欲があつてもなかなか次につなげることが難しくなつてきていることも含めて、農業経営の継続が担保されるような長期的な農業政策を行政にもお願いしていかなければと感じています。

——農協・組合員・行政が一体となつて進んでいく必要があると。

**組合長** 特に、我々農協の組織は組合員さんとそれを支える職員で成り立っており、言い換えるところは車の両輪と同じです。双方が同じスピードで同じ方向へ向かっていかないとバランスがとれず成り立ちませんし、それぞれの役割があることをお互いに認識して進めていかなければならないんだろつと強く感じますね。

——つまり、組合員、そして職員の皆さんがコミュニケーションを図って意見交換をしながら、上手い具合に前に進んでいきたいということでしょうか。

**組合長** まさに、その通りですね。そのために幾つかの対策を実践しておるところですが、その一つが「1支店1協同活動」です。今、それぞれの支店で組合員さんと相談をしながら、色々と会合を重ねているところですよ。

——それは、どのような事を目的とした取り組みなのでしょうか。

**組合長** 例えば、JAまつりがそうです。地域の皆さんとのコミュニケーションの場として開催させて頂いておりますが、今年も多くの方に会場頂きました。地区によってはJAまつりのことを意識しながら地区の行事を組んで頂いているような声も聞きますし、地域の行事のなかでも他の行事に負けないだけの動員を頂いていると自負しています。そういうことも含めて、もうちよつと間口を広げて頂き、それぞれの地区の特色を生かした催しが出来ないかと色々検討していただいております。組合員さんと職員とが協同で同じ目標で同じ目標を共有しながらコミュニケーションを一つの目的を果たしていく・作り上げていくということ



が大事なんだろうと思います。協同の作業を通じて、組合員さんのお考えになっていること、あるいは職員の対応の仕方がお互いに理解出来る、そんな機会になればいいなと思っております。

——お話を伺っていると、協同活動を実践することで、かつての「農協が必ず生活のなかにある」という時代に再び戻りたい、戻ったらどうかということをおっしゃりたいのかと。

**組合長** 「常にお役立ちできる農協でありたい」ということに尽きます。今は組合員さんの生活様式も極めて多様化されておりますから、組合員さんが期待されるサービスについても非常に幅が広がっています。ですから、まさに農協がもっている多面

れるだろう、このぐらいはしてくれらるだろう」と考えるのと同じように、組合員さんも農協ならという期待があるから相談してくれる。ところが、それに対して言動や行動が伴わないと信頼していただけるわけがないですから、まずは組合員さんに何を期待されているのかをしっかりと受け止めさせて貰い、それにきちんと対応する。これは当たり前なこと、その結果が信頼に繋がっていくのだと思います。

——考えれば、組合長は組合員のお気持ちと経営に携わった今のお気持ちと、両方お持ちでいらっしゃるんですね。それを踏まえて、組合長がお考えになるJAさつぼろの将来性というか進むべき方向というのはどういふものなのでしょうか？

**組合長** まず一つは組織の活性化です。昨年からは正組合員の加入促進運動を実施して丁度一年になります。やはり組合員さんは組織の大きな基盤ですから、減少に歯止めをかけるべく、正組合員の戸数複数性を採用しました。つまり、奥さんや後継者の息子さんにも正組合員になっていただき積極的に農協の運営に参加頂くことです。特に、女性の正組合員を増やしてもらうことを強くお願いを致しました。

——女性は力がありますからね。馬

力があって！

**組合長** はい。私は特に女性のパワーというものを重く受け止めています。既に農協運営に極めて大きな役割を果たしていただいており組織活動に欠かせない存在ですが、尚一層、農協の運営に女性の声や視点、感性を反映させて頂きたいと思っています。

——加入促進運動を実施した成果はいかがでしたか？

**組合長** 女性の正組合員に関しては、ほぼ一年間で一四三名増えました。全体では一、五七七名で全体の三九%となりましたので、これは大きな成果だったと思います。同時に、女性総代数についても総代定数の一〇%である六十名を目安にしております。折しも改選期であったことから各地区農事組合にお願いをし、積極的に推薦を頂いた結果、五十名の女性総代を決定頂きました。この段階で五十名出て頂けるのは非常に心強く、大変喜んでいらっしゃるのです。

——それは大きな成果ですね。では組合長と致しまして、今、思うことはありますか？

**組合長** 今、我々に与えられている課題はたくさんあります。TPPを始めとした経済の枠組みが世界規模でものすごいスピードで進んでおり、今、最終的な局面を迎えております。この広報誌がお手元に届く頃には大

筋が見えてきているんだと思います。

また、農産物もさることながら我々のJA共済や全労済が障壁・標的になっているような節があり、大きな柱である共済事業の成り行きが心配でありますし、金融事業にしてもまだまだ変化していくのだろうと思えますから、それらを全て含めて安定経営を最優先で意識してやらなければならぬと感じております。都市型農協といわれておりますが、都市と農業の融和もあるだろうと思っております。幸いなことに、札幌は日本での玉葱の発祥の地です。札幌黄というブランドがあり、手稲山口では大浜みやこ、また清田真栄にはホウレン草（ポールスター）等々こういったブランドは我々にとって財産ですから、しっかりと継承し育てていく。農協としてはこれらのブランド（特産品）の一番の応援団でありたいのです。昨年、札幌黄のスープを作りました。これもまさにブランドイメージ向上を含め、応援団でありたいの思いから、商品開発からパッケージ・デザインまで自分たちで作りました。色々と研究を重ねていかなければならない部分もありますが、どうしても都市のなかでの農業を守り続けていかなければいけない。守っていけると思っております。

——今のお話しが全て、組合長の決

意だなと思いつながら聞かせて頂きました。最後に、組合員の皆さんにお伝えしたいことはありますか？

**組合長** 我々農協の経営体系は総合事業を基盤としており、収益バランスの取れた、組合員さんが安心して任せられる安定した経営が不可欠であります。組織の本質は組合員さんとの協同活動であろうと思えます。組合員の皆さんにご支援を頂き、問題を共有しながら進んでいかなければならないと思っております。組合員の皆さんの尚一層のご理解頂くこ

とを願い、「常在戦場」、そんな想いで日々努力をさせていただく所存でございます。尚一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

——組合長のその笑顔で、今年一年体調に気をつけて頂いて、様々な場面で活躍されますことを祈っております。まだまだお話を伺いたいです。今日はどうもありがとうございました。

**組合長** ありがとうございます。

